

科目区分：中等教育コース(国語教育専修)

授業科目名：書写演習 1、2

## 「書写演習」授業報告

国語教育講座・東 賢司

### 1 授業の概要

本授業は「書道実践演習」という主として中国での実地観察を中心とした演習を廃止し、代わりに国語科書写の科目として立てたものである。課程の統廃合が行われる小規模なカリキュラムの変更に合わせて行ったが、4年生に配置しているために数年が経過し、本年度が開講の初年次にあたった。書写に関する科目は免許法上2単位だけが必修ということもあり、また、その必修科目を3年生後期に配置していることもあり、4年生に配置することにした。

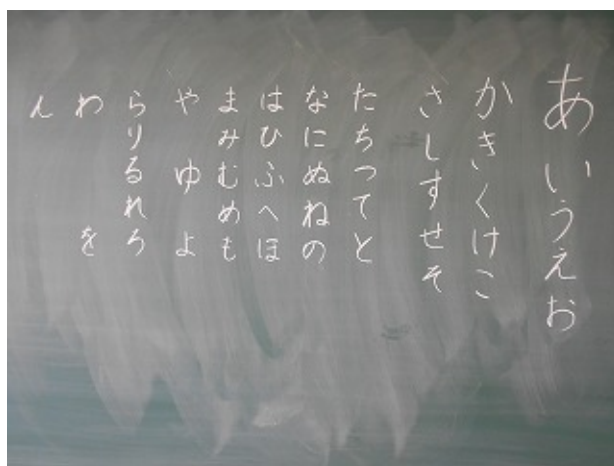
新規の科目ということで、シラバスを作成して申請したが、半期の授業二つを連続して学習することをイメージして作り、前半は板書を後半は硬筆をというテーマを設定し、それまでの講義であまり触れることができなかった内容を重点的に学習し、実践力の一助になればいいと考えていた。

初等と中等の学習では、機会がある度に「筆順」の重要性や「筆順と整った字形の関連性」について話をしてきた。以前は教育実習の板書を見て、飛び上がるようなこともしばしば経験してきたが、最近は、安定した書き方が（少なくとも国語を専門としようとする学生さんの中では）できてきたような気がする。

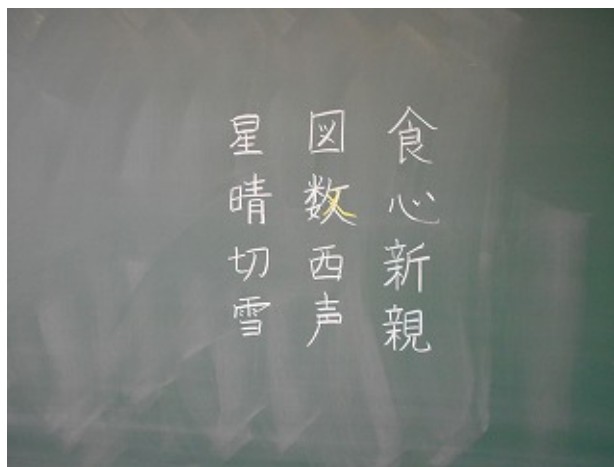
テーマとしている板書は、私が学部学生の時に「教室の形はいずれ変わり、黒板はなくなる」と言われ、電子黒板が出たときも「黒板は不要」と言われていたが、相変わらず教育実習でも「板書計画」は重要な内容として示されている。

### 2 板書の様子

次の写真は、板書の様子を順番に記したものである。



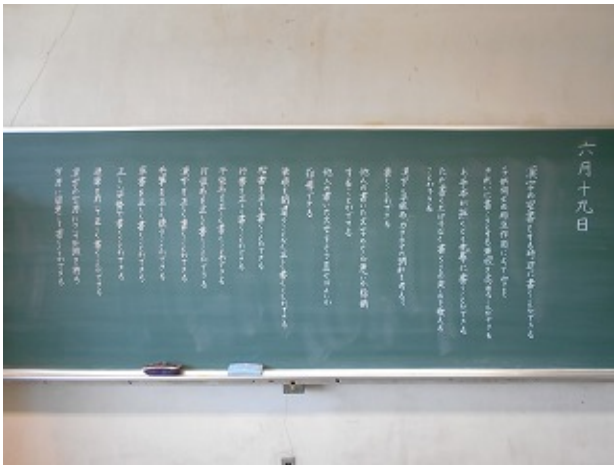
4月 10 日



4月 25 日



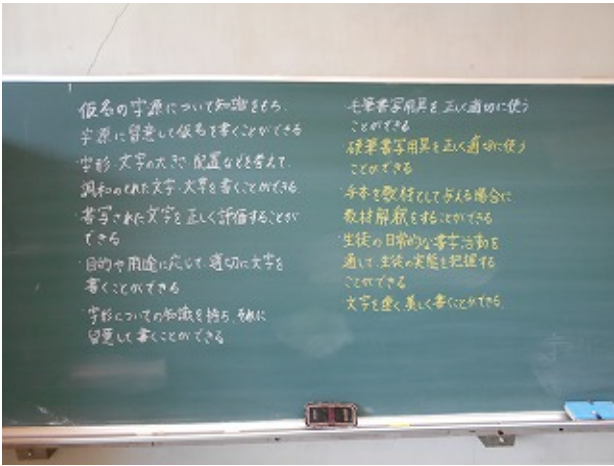
6月 12 日



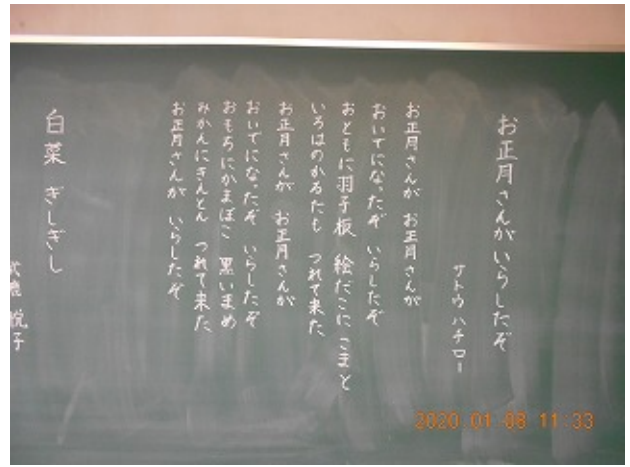
6月19日



1月8日



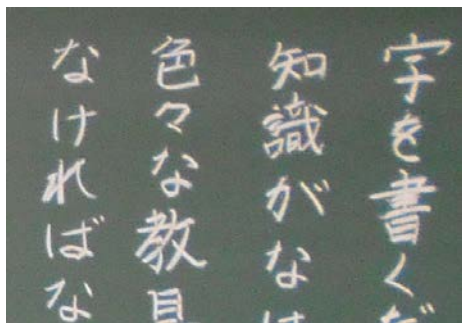
7月31日



1月15日



12月4日



12月4日(部分)

授業は下記の順番で進めている。

- ①平仮名
- ②漢字単体（小学校で学習する学年別漢字  
配当表漢字）
- ③平仮名と漢字の混合文
- ④簡条書き
- ⑤横書き
- ⑥詩文
- ⑦和歌・短歌
- ⑧長文

板書力の向上の評価は、下に記すアンケートの結果に端的に表れている。この評価を負っていくと上達の様子につれて自信を深めていることがよく理解できる。

### 3 学生のアンケート

学生には毎時間の聞き取りを行った。自己評価が多いが以下のようなものがあった。下記に関しては受講生の意見を書き留めているが、教師の見立てと一致する。

- ・チョークの持ち方が定まらず、自分で自分の文字がコントロールできない。(4月 10 日)
- ・小学校低学年で学ぶ基本的な漢字でも筆順が間違っていると指摘され、大変ショックを受けた(4月 25 日)
- ・漢字の筆順を間違えることが少なくなり、また同じ大きさを整った字形を書けるようになった(6月 12 日)
- ・漢字と仮名の混じった文書では大きさを覚えて書くことが難しい。また、文字の分量が多くなっているので速度が気になる(6月 19 日)
- ・短文は一つ一つの文字の量が少ないため安心して文字を書くことができる。行頭をそろえて書くことをでき、また行をまっすぐ書くことや行間を整えて書くことができるようになった。(6月 19 日)
- ・教員採用試験の二次試験対策の意味あいもあり、横書きを練習したが、真横にまっすぐ書くことができた。また字間も見やすく書くことができた。(7月 31 日)
- ・箇条書きの文書を黒板の端から端まで短時間で書くことができるようになった(12月 4 日)
- ・詩文について行間字間は言うまでもなく、段落等も意識して見やすく書くことができるようになった。(1月 8 日)
- ・漢字と仮名の混じった文書も短い時間での確にまとめて書くことが出来るようになった(1月 15 日)

昨年度の報告書で、文字指導をする場合、できあがった作品を評価するのではなく、筆記具を持って書いているところを指導することの重要性について記載をした。受講生は必修の授業で一通りの課題をこなした上でこの授業を受講をしたが、4月～5月には常用漢字の筆順の間違いが多く、今までの自分の書き方に問題が多くあることが掴めたようである。また、板書は文字を大きく書くこともあり、間違いが目立つことも意識付けができた。「黒板はすぐになくなる」と言われてから既に何十年も経過している。黒板の代用とみられていた、OHP、OHC、パソコン、電子黒板、いずれも一長一短があり、未だに黒板は健在である。電子機器よりもむしろ、ホワイトボードというアナログなものが台頭し、

なくなったのは柔らかいチョークだけというのも皮肉な者である。

また、実際に板書をするところを他者に見られていることも精神的にはストレスになる。ただ、これは教師としては欠かせない関門であり、現場に出る前に体験できたことは、意識の上でも教師になるための意識付けにやくだっただろうと感じている。

#### 4 地域社会を核とした教育と研究のつながりについて

本授業は新規の課程認科目ということもあり、地域社会とのつながりについてを主題としていない。

#### 5 今後の課題

書道実習室の黒板は横幅が3メートルほどの小さなものであり、受講学生が増加した場合、複数の学生でスペースを分け合って練習を行う必要がある。練習時間が現在の半分、1/4と短くなる可能性がある。この授業は実技を伴う演習をすることが主体的な授業内容であるために、字間をかけたきめ細やかな指導が必要である。選択科目であるので、問題意識や上達の意欲は高い者が集まってくると思われるため、それらのやる気をそがないような工夫が必要である。

#### 6 番外編



この写真は、学生のチョークを撮影したものである。右は比較的に早い時期に、左は授業後半に使っていた物である。これらによって板書力の優劣が判断できることは教師でもない分からないかもしれないが、チョークの持ち方や使い方も技量が向上すると変化を

してくる。

2020 年 2 月 26 日記